



近代日本が導入した米欧女子教育の理念と制度の研究： 津田梅子の女子英学塾と下田歌子の実践女学校を中心に [全文の要約]

著者	孫 東芳
発行年	2020-09-20
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第809号
URL	http://doi.org/10.32286/00024703

関西大学審査学位論文

令和二年（2020）

博士（文化交渉学）

近代日本が導入した米欧女子教育の理念と制度の研究
— 津田梅子の女子英学塾と下田歌子の実践女学校を中心に —

論文要旨

関西大学大学院

東アジア文化研究科

孫 東芳

論文の要旨

本論文は「西学東漸における津田梅子とアメリカ及びその女子教育思想」、「西学東漸における下田歌子の欧米経験及びその女子教育思想」、「実践女学校と女子英学塾の創設と実践」の三部に分けて考察を進めた。第一部と第二部では津田梅子と下田歌子について、それぞれの西学東漸の背景において、二人の思想上における伝統と西洋へのスタンスと選択を確認した。第三部では、それらの影響を受けた歌子と梅子が日本国内で行った実践をめぐって、つまり「実践女学校」と「女子英学塾」のことを詳細に追及した。全体の構成は以下の通りである。

序論では、本論文の問題提起、即ち①西学東漸における伝統と西洋への対峙と選択、②個人本位と明治国家主義の選択的受容と改良的融合、③「実践女学校」と「女子英学塾」の創設と実践と三つの要点を指摘している。まず第一節では、明治維新と緊密に関わる江戸の教育、即ち、儒学の教育力が圧倒的であったことを確認した。その中でも女子教育と寺子屋の教育についての状況を概観した。これにより、江戸時代の女子教育は、ある程度の発展を遂げたことが理解でき、これが明治の女子教育の基本的なベースとなったことが明らかになった。第二節では、本論文の主要研究対象というべき、梅子と歌子の生い立ちを簡潔に紹介した。

第一部「西学東漸における津田梅子とアメリカ及びその女子教育思想」は、次の二章から構成されている。

第一章「津田梅子のアメリカ留学事情と日本女性への関心の啓発」では、梅子の二回渡米経験の足跡を記し、即ち岩倉使節団に随行する梅子と、二回目は、自己の要求によって米国留学を目指す梅子の留米経験を主にして比較した。その中では、梅子が欧米啓蒙教育を受ける間で、当時の日本人女性地位の低さに寄せた関心を論じた。梅子の女性の存在に対する使命感を自覚したことを明らかにした。これが本論文の着眼点である。

第二章「日清戦争における津田梅子の日本婦人の姿と宗教観—*Japanese Women and the War*を手がかりにして—」では、これまで詳しく調査されていない、日清戦争後、即ち1895（明治28）年5月と6月に、梅子が、米誌 *The New York Independent* に、「日本婦人と戦争」（*Japanese Women and the War*）と題する二つの文章を発表したことを解明した。その二つの文章を解読しながら、そこで梅子が表した当時の日本女性の姿、そして梅子による日本女性への関心と戦争観、また梅子が考えた当時の日本人の「愛国心」とキリスト教の教義との関係などについて深く考察した。具体的に言えば、第一節では、*The New York Independent* 上での梅子のコメントから論じ始め、彼女の国際的な視野と婦女への関心を捉えつつ、彼女の近況とその時期におけるキリスト教との関わりについて、詳しく紹介した。第二節では、梅子が記した戦争中のさまざまな女性、戦争と関わる妻たちの姿、寺院を拝む老婦人の姿などを整理した。また、梅子が戦争で夫・息子が亡くしてしまった妻や老婦人たちを同情し、婦女地位の低さは従来からの東洋の文化や習慣に束縛されたためであると批判し

たことを考察した。第三節では、戦争と人々の状況を見た梅子が、戦時下の天皇と国民の関係は、「忠君」や「愛国心」などで維持されていることを深く感じたことを解明した。その忠君思想とキリスト教の根源と類比できることを梅子が認識して、彼女に「愛国心は宗教に取って代わる」、「日本ではキリスト教の未来がある」という期待の思いが生じることを考察した。

第二部「西学東漸における下田歌子の欧米経験及びその女子教育思想」は、次の三章から構成されている。

第三章「『国のすがた』をめぐる下田歌子と三島通庸—自由民権運動末期の教科書採用について—」という論考で、歌子から三島通庸（1835-1888）宛の49通にも上る書簡を手がかりにして論を進めた。これは、1886（明治19）年、道德教科書『国のすがた』を歌子が執筆し、三島の名前で刊行しようとした間で送った書簡である。こうした書簡を読み解くうちに、彼女の当該道德書への抱負と野心を考察して第一節に記した。また、『国のすがた』の内容を解説し、歌子が考えた近代国家の理想図を解明した。そして、当時の自由民権運動末期の社会背景を踏まえて、それを「教科書疑獄事件」と関連付けて考察した。第二節は、書簡を通じ、三島の出仕から、『国のすがた』の題字、序文の執筆者と出版、採用を目指す理由とその困難などのことをめぐって、『国のすがた』刊行の経緯を明らかにした。以上から、三島をはじめ、歌子と政府各要人との人間関係を窺い知ることができた。おわりに、彼女が明治政府という「男の世界」に巻き込まれてしまう状況を示した。また、歌子はさまざまな人間たちと、相互に提携して事業を進める明治国家というものを、大きなテーマによって、本文にはマクロ的な側面から見るのではないかと考えた。

第四章「日清戦争前後の下田歌子の欧州視察と文化交渉—『泰西婦女風俗』を手がかりにして—」においては、日清戦争時における歌子の経歴と第二章の梅子の分析を比較して考察した。1893年（明治26）9月より1895年8月までの二年間、歌子は、皇女たちの御養育主任を担当していた枢密顧問官の佐々木高行の部下の教育掛として、イギリスに滞在し、ヨーロッパ諸国を視察した。本章の第一節では、当時の駐英公使青木周蔵とヴィクトリア女王に謁見する際に、どのような礼服を着用すべきかについて意見の齟齬が生じたが、歌子は、日本女性の矜持を示すために、和服姿で謁見することを決意したこと、そして、その結果、『ロンドン・タイムズ』に「戦勝国日本の女性の伝統の正装」という大見出しで歌子が報道されたことなどを論じた。第二節では、帰朝四年後に出版された『泰西婦女風俗』（大日本女学会編「女学叢書」第一巻、1899年8月）にもとづき、欧米女子教育は貴族女子教育に限らず、諸階級の家庭の躰教育や学校教育、特に中流階級の婦人の生活慣習や教養とマナーの現状およびその「内治」と「外交」の在り方に関する歌子の詳しい観察記録を、表にまとめて分析した。第三節では、「西洋文明の根源」であるキリスト教に対する歌子の認識、学校教育における宗教的な徳育により育まれた生徒たちの倫理観、忠誠心と勤勉精神に対して歌子が感心したこと、および、一部の教会の神父たちの不祥事に対する歌子の批判などに触れ、教育勅語が発布された当時の日本の道德教育の現状と考え合わせて歌子の宗教観を紹介し

た。そして、欧米での経歴が歌子への影響を論じた。「おわりに」では、欧州視察中、歌子が、ヴィクトリア女王、青木、そして寄宿先のゴルドン夫人などとの文化交流活動を評価し、伝統と革新の融合、そして、東西文明が交錯する中での歌子による取捨選択のスタンス、およびその理想的女子像を確認することができた。

第五章「近代日本の皇族女子教育思想について—下田歌子著『内親王殿下御教育意見』を手掛かりにして—」において、学習院と華族女学校の全盛時期における歌子を取り上げた。その時期の歌子は、華族女学校の教授兼学監を担当する傍ら、数多くの著作を世に出している。それらの著作は主に教科書の文体であった。その中から、代表作である『和文教科書』、『内親王殿下御教育意見』を手がかりにして、歌子によるこの時期の女子教育構想、特に貴族女子教育思想の内実を確認した。本章の第一節では、学習院の由来とその後継である華族女学校の由来などを紹介し、また、その中で歌子の女子教育への登場を紹介した。第二節では、西村茂樹の徳育論を比較対象として、当時華族女学校の実力者である歌子が行った教育活動、例えば、『和文教科書』の著作や「海老茶式部」の創案などに考察を加えた。第三節では、『内親王殿下御教育意見』を中心に分析し、歌子の皇族女子教育思想の特徴は、「体徳智」を涵養すると主張したことであると分かった。その「徳」は国民が仰ぐべき、皇室を中心としての道徳、婦徳、つまり従来「孝順貞烈慈愛の徳」である。また、体徳智という三方面的の総合関係について論じた。「おわりに」では、歌子の貴族、皇族女子の教育思想をまとめた。歌子の皇族女子教育思想は、体徳智の三方面的の教育を統一し、古来の婦人の徳の長所を生かしたものと、歌子が認識した欧米の教育理念を有機的に融合したものであることを明らかにした。そうした過程で、歌子の華族、皇族の女子教育思想が次第に形成したと思われる。

第三部「実践女学校と女子英学塾の創設とその実践」は、次の四章から構成されている。

第六章「女学校の創設と明治国家—下田歌子と津田梅子の比較を中心として—」では、歌子と梅子が創設した実践女学校と女子英学塾、それぞれの創設過程を重点的に考察した。まず第一節では、明治初期から中期の明治政府の教育方針をキーとして考察し、二人が学校や塾を創る以前の教育環境を究明した。第二節と第三節では、実践女学校と女子英学塾の創設の過程を詳細に考察した。そこでは、二人の女性教育者が、明治政府とどのような「距離」を置いたのか、また、両学校に見られる女子教育の方針は、どちらが当時の主流になったのかということ考察した。

第七章「実践女学校と女子英学塾における欧米女子教育の導入と比較」では、二人の教育者がこれまで経験し体得したものが、「実践女学校」と「女子英学塾」という形で実ったについて論じた。本章では、導入された具体的な教育制度と実現された両学校における教育方針またはその刷新について、比較検討して分析した。第一節では、実践女学校の規則に始まって、家庭の中での「良妻賢母」という教育方針、また、学科の課程・雇用された教師・生徒たちの進路の面から見る実践女学校の「和魂洋才」という理念が明らかにし、帝国婦人協会の組織から大衆女子教育の推進までの変化もまた実践女学校の特徴だと表明した。第二節では、梅子が国際的女子観によって「オールラウンド・ウーマン」の理念を実施したこと

を考察した。そして、高等教育とキリスト教育の提唱も女子英学塾の教育コンセプトであることを解明した。

第八章では、『婦女新聞』に見る女子英学塾の諸相を論じた。具体的には、女子英学塾の発展についてだけでなく、女子英学塾の存在意味と担った国内、国外での責任・役割といった側面についても調査した。第一節では、女子英学塾にとって、『婦女新聞』は単なる普通の新聞紙、同塾の宣伝役だけでなく、終始塾を支えた味方であり、同じ事業を進めた盟友でもあったことを明らかにした。そういう関係だから、『婦女新聞』が塾の発展、歴史を記録してだけでなく、塾内の生徒の個人ことも記事の材料にしていた。それによって、当時、女子英学塾の社会的影響力を詳しく了解することができた。第二節では、『婦女新聞』によって、同塾の国内的貢献を次の二点に凝縮できた。一、米国留学奨学金という形式により多くの日本人女性を米国の大学に送ったこと。二、同奨学金で日本の英語教師を養成したこと。第三節では、『婦女新聞』の報道による塾の戦時への貢献を考察した。同塾は、日露戦争の際に社会寄付と前線の後援的役割を果たしたことが分かった。また、同塾とアメリカの交流、特に排日問題において、女子英学塾の立場は、特に津田梅子の個人的体験に帰する部分が大きいことが分かった。

第九章では、歌子の機関誌である『日本婦人』、『愛国婦人』と、梅子による女子英学塾の『英学新報』から見る二人の社会に対するフィードバックをめぐって議論を展開した。また、二つの学校の大正時代までの具体的な教育活動を考察し、晩年になった二人の女子教育への思索について、歌子は職業女性、実学教育の方に進んだが、梅子は英文の教科書や雑誌の発行に尽力したことを明らかにした。そして、歌子と梅子の精神の高貴さを確信した上で、パイオニアというべき二人の教育理念の異同を比較検討し、それをまとめた。

結論として、近代化を進めていた日本は、欧米の教育制度や教育精神の模倣と導入によって樹立しようとした新しい日本の教育制度と教育内容を実現した。その過程は極めて複雑なものであった。その中には、和洋融合を備えていた歌子にせよ、また全般化した梅子にせよ、自分なりの貢献もあった。どのような女性を育成するのかについて欧米経験のある二人の教育者は重要な回答を出したとあってよい。二人の思い描いた女性像はそれぞれであるが、女子英語教育においても、良妻賢母の教育においても、その他のあらゆる分野においても、まず近代的で、国家意識を持つ日本婦人を作ることが、二人にとって最大の課題であった。二人が提唱した理想の女性像は、「良妻賢母」型の女性にせよ、「人格完全」型の女性にせよ、今なお、家庭型と社会型の二大類型の女性として存在すると考えてよい。